

研究所報

No. 19

1988. 6. 30.

目次	親鸞研究の一視点	1
	昭和63年度「指定研究」 研究計画紹介	3
	昭和62年度「指定研究」 研究経過報告	4
	昭和63年度「一般研究」 研究目的紹介	9
	昭和62年度「一般研究」 研究概要	12

親鸞研究の一視点

学長事務取扱 寺川俊昭
教授・真宗学

仏教が完全に日本人のものとなることができたのは、鎌倉時代のすぐれた仏教者たちの努力によってであるとは、現在ほぼ通念になっている了解である。いい換えれば、鎌倉時代のすぐれた仏教者たちの求道の苦闘をまっとうして、日本人は自らの仏教をもつことができたのである、ということができるのであろう。ことに日本浄土教の歴史を形成した仏教者たち、すなわち法然や親鸞、あるいは一遍たちの信念と人生をみるならば、それがいかに日本の風土と文化の伝統にしっかりと根をおろしているかを、われわれは一種の感銘と共に、確かに知ることができる。いわば仏教は、親鸞のいわゆる「諸寺の釈門」、すなわち戒律によって社会と区別された伝統的教団を捨て去ったこれらの仏教者たちの苦闘を通して、生活する日本人大衆の心の驍にまで浸み通るほどに具体化し、そのようなものとして、日本人は自らの仏教をもつことができたのである。

ことに親鸞については、和文で書かれた『歎異抄』の強烈な感化もあって、最も日本的な仏教者という理解は、ほぼ通念となっているといつてよいのであろう。

ところが、清沢満之の信念とその歴史的展開を自らの研究主題としている、バックネル大学のジェラルド・クック教授は、親鸞を“非伝統的日本人”と評している。この親鸞理解が、仏者親鸞

の独自性について何か大切なものを示唆しているという思いを、以来私は持ち続けていた。そしてこのような関心をもって親鸞の著作をみる時、例えば『教行信証』総序の次のような言葉が、改めて私の心に響いてくるのである。

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。

あるいは同じ『教行信証』の「正信偈」に、

印度・西天の論家、中夏・日域の高僧、大聖興世の正意を顕わし、如来の本誓機に應ぜることを明かす。

と述べて、インド・西域の国々、中国そして日本を、真実教が展開した国々として挙げていているのである。

日本を「粟散片州」と感じていた親鸞は、西方にインドあるいは中国という偉大な文化世界があることを、もとよりよく承知していたに違いない。たしかにインドあるいは中国は、それ自身一つの“世界”というべき堂々たる文化的伝統であった。したがって本願の仏道の伝統を、「三国の七祖」すなわちインド、中国そして日本に出た、すぐれた仏教者たちによって形成された「大行の歴史」と把握した親鸞の眼は、高くそして広く“世界”に向かって開かれていたというべきであろう。

のみならず親鸞は、本願の信がそれを得た人間にもたらす利益を述べる中で、このようなことを語っている。

しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆえに、これを「歓喜地」と名づく。これを初果に喩うることは、初果の聖者、なお睡眠し懶墮なれども、二十九有に至らず。……

ここで親鸞は、本願の信の獲得に伴う大きな歓喜を、大乘の菩薩道がそこから始まる「初歓喜地」の歓喜と等しいといているのであるが、いたく私の心を惹くのは、それを更に「初果」に喩えていることである。初果とは、預流果・一來果・不還果・阿羅漢果と次第していく阿羅漢道の、最初の「預流果」のことである。要するに親鸞は、本願の仏道にまさしく立った自覚である、大きな歓喜を伴う本願の信を、大乘の仏道体系でいえば菩薩の初歓喜地に、小乗の仏道体系でいえば阿羅漢道の預流果に等しいものと、主張していることになる。この預流果に始まる阿羅漢果は、「梵行す

でに立ち、所作すでに弁成し、また後有を受けず」といわれるように、人間の知的乃至は感情的障害物である煩惱に完全にうち勝った、厳しい自覚的境位であろう。親鸞がこのことに敢えて言及するその点に、私はいたく心ひかれるのである。

かつて芥川龍之介は、いわゆるキリシタン物に材料を得た作品群で、また遠藤周作氏は例えばその作品『沈黙』において、この日本の“湿度”の高い精神的風土の中に生きる日本人の宗教心の特徴を、見事に画き上げた。それに対して親鸞は、中国的文化世界の遙かな彼方、広大な乾燥地帯である西域に、更にインド的文化世界にその関心を向けていた。彼の精神世界は、“湿度”の高い日本の文化的世界にありつつも、それと異質の西域・インドの世界に展開した仏道の伝統に対して、開かれていたというべきである。晩年の親鸞が、日本人の宗教心にとってはかなり異質であり、日本人が容易にはそのイメージを結びかねる「大般涅槃道」を、力を尽くして語り続けていることとあいまって、このことは私の親鸞の思想研究の上に、意味深い一つの示唆を与えて止まない。

研究所出版物の御案内

- 『研究所紀要』 No 1 ~ No 5
- 『研究所紀要』 No 4 別冊
 - 別冊 1 『教行信証』 科文集
 - 2 『教行信証』 の基礎的研究に関する報告
 - 『教行信証』 「化身土卷(末)」 校異
 - 研究雑誌所収 『教行信証』 関係論文目録
- 『上首寮日記』 I (真宗学事資料叢書)
- 『真宗学事研究関係文献目録』
- 『大谷大学図書館蔵 西藏文献目録索引』
- 『大谷大学図書館蔵 西藏大蔵経丹殊爾勘同目録』 II-1
- 『大谷大学図書館蔵 西藏語訳大唐西域記』
(大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書 No 1)

上記出版物を販売しておりますので御希望の方は、研究所の方へお申し込み下さい。なお価格は、『紀要』 No 1、¥1,500、No 2 ~ No 4、¥2,200、No 5、¥2,000、『紀要』別冊 1、¥3,600、別冊 2、¥4,000、『目録索引』 ¥4,000、『勘同目録』 ¥4,500、『大唐西域記』 ¥18,000、『上首寮日記』 I ¥3,000、『文献目録』 ¥500でお頒ちいたしております。

大谷大学真宗総合研究所

昭和63年度「指定研究」研究計画紹介

昭和63年度の「指定研究」研究事業計画が、研究所委員会が審議され、決定された。研究名および研究課題は、昨年の通りであるが、研究組織については、4つの研究班とも代表が寺川俊昭学長事務取扱になるなど、異動があった。

「真宗学事研究」では、刊行・収集整理・研究の三分野で諸作業を行う。『上首寮日記』の続刊、「条規集」（仮題）の刊行、さらに「厳如上人一代記」の刊行準備をはじめ、刊行物のカード化等の収集整理、諸雑誌・機関紙の論文目録の作製、寺院調査、さらに研究会の開催などを精力的に行なう。

「海外仏教研究」ではこれまで推進してきた欧米諸国の仏教研究についての調査が一段落したので、この研究成果をもとにドイツの仏教研究の本格的調査に着手する。このため嘱託研究員に新しいスタッフが迎えられた。ソヴィエトの仏教研究の調査は今年度も継続して行われる。また懸案のビブリオグラフィーの作製の第一歩が具体化される。

「西藏文献研究」では、勘同目録の第8分冊の刊行および蔵外文献中に見出される稀観本の解説付刊行に着手する。

「大蔵経学術用語研究」では、昨年新しく発足した「日本撰述の俱舍論関係典籍における学術用語の研究」を継続して行く。本年度は、すでに分類した学術用語の50音索引、分類項目別索引、字画索引を作製する予定である。

研 究 名	研 究 課 題 及 び 研 究 組 織
真宗学事研究 (特 定 研 究 班) (代表 学長事務取扱) 寺川俊昭	研究課題 「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」 研究員 名畑 崇 (チーフ・教授・日本仏教史学) 幡谷 明 (教授・真宗学) 大竹 鑑 (教授・教育学) 鈴木幹雄 (教授・倫理学) 木場明志 (専任講師・国史学) 草野顕之 (専任講師・日本仏教史学) 箕浦恵了 (所長事務取扱・教授・西洋哲学) 安富信哉 (主事・助教授・真宗学) 嘱託研究員 松本専成 (滋賀県立玉川高校教諭) 柏原祐泉 (本学名誉教授・国史学) 井上 円 (本学非常勤講師・真宗学) 研究補助員 三本昌之 (修士課程修了生・日本仏教史学) 深田虎雄、綿谷勝信 (以上博士課程修了生・日本仏教史学) 前田一郎、判田哲也、江城忠雄、木越 康、杉本 理 (以上博士課程) 山口昭彦 (修士課程修了生・国史学) 資料整理員 三木彰円 (修士課程)
海外仏教研究 (特 定 研 究 班) (代表 学長事務取扱) 寺川俊昭	研究課題 「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」 研究員 長崎法潤 (チーフ・教授・インド学) 岩田慶治 (教授・社会学) 多田 稔 (教授・英文学) 宮下晴輝 (専任講師・仏教学) 箕浦恵了 (所長事務取扱・教授・西洋哲学) 安富信哉 (主事・助教授・真宗学) 嘱託研究員 今枝由郎 (フランス国立中央科学研究所研究員) 大河内了義 (神戸大学教授) リノ・ベリーニ (本学非常勤講師・日本仏教史学) ジャン・ノエル・ロベール (フランス国立中央科学研究所主任研究員・高等学院講師) Y. カルナダーサ (ケラニア大学教授、スリランカ) ミハエル・ハーン (ボン大学教授) 本田パトリシア (修士課程修了生・真宗学・在アメリカ) 浅野玄誠 (本学非常勤講師・インド学) 研究補助員 畑辺初代、加藤 均、茨田通俊 (以上博士課程)
西藏文献研究 (委 託 研 究 班) (代表 学長事務取扱) 寺川俊昭	研究課題 「大谷大学所蔵の北京版西藏大蔵経及び蔵外文献の文献研究」 研究員 小川一乗 (チーフ・教授・仏教学) 片野道雄 (助教授・仏教学) 小谷信千代、白館戒雲 (以上専任講師・仏教学) 研究補助員 松田和信 (本学非常勤講師・仏教学) アレクサンダー・ノートン (元客員研究員)
大蔵経学術用語研究 (委 託 研 究 班) (代表 学長事務取扱) 寺川俊昭	研究課題 「日本撰述の俱舍論関係典籍における学術用語の研究」 研究員 鍵主良敬 (チーフ・教授・仏教学) 福島光哉、古田和弘 (以上教授・仏教学) 木村宣彰、一色順心 (以上専任講師・仏教学) 研究補助員 兵藤一夫、山野俊郎 (以上本学非常勤講師・仏教学) 織田顕祐 (元本学特別研修員) 萩原晃俊 (博士課程修了生)

昭和62年度

「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

「大谷大学300年史編纂・それに関する文献資料の研究」

研究員・チーフ 名畑 崇

「真宗学事研究」は、昭和六十年度に与えられた「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」の課題のもと、大学史編纂に関する研究・作業を、資料の「刊行」「収集整理」「研究」の三分野で行なってきた。

「刊行」に於いては、真宗学事資料叢書の第二冊目として『上首寮日記』Ⅱを刊行、『条規集』（仮題）・『嚴如上人一代記』は、それぞれ昭和六十三年・六十四年度刊行を目指しての諸作業を行なう事であった。『上首寮日記』Ⅱは、初稿校正終了後、当初予定していなかった解説を掲載する事となったため、大幅に遅延し、年度末の刊行が不可能となった。昭和六十三年六月一杯を目処に発刊の予定である。『条規集』は、既に前年度に江戸時代（主に高倉学寮）分を『校本高倉学寮諸制条類纂』としてまとめ、それ以降明治八年から同三十四年迄は『配紙』『宗報』等にあたり、収集する事ができた。以上の作業を受け、六十二年は大正十三年迄を収集整理した。これは『条規集』掲載分を、文部省大学令により大谷大学が認可され、同年に専門部を開設する迄と決定した事による。これによって、江戸期・明治大正期の条規学則等をほぼ収集整理することができた。『嚴如上人一代記』は『教化研究』に翻刻されたスタイルを踏襲し、頭註・解題を付す予定であったが、その作業自体研究となり得るものであり、また刊行が大幅に遅れる事も予想される事から、解説を付すに留め、六十四年度に第一冊の刊行を目指す事になった。なお教学研究本は大谷大学図書館本の写本である事が判明した。

「収集整理」の分野では、『中外日報』『上首寮日記』から学事資料の抽出と、「講師年譜」作成の諸作業が継続して行なわれた。「学科講座変遷表」は、今年度新に着手された「教職員在職表」作成作業と共に、条規学則にうたわれた教育理念・構想を現場に反映させたものとして、大きな意義を持つ。また学事研にパソコンが導入された事は画期的な事であった。これ迄に蓄積された数

千枚の資料カードを年代順に入力し、学事史基本年表の作成に備えると共に、キーワードの使用により、見出し以外の人名・件名・書名等の検索が迅速におこなえるようになった。今後『中外日報』『上首寮日記』『講師年譜』等諸作業によって得られたデータ入力も行なわなければならないが、各作業によりカード項目のとり方がまちまちであったので、統一のカードマニュアルを作成し、それに基づく資料カードの作成が必要となる。将来を展望すれば、学事研におけるデータベースの構築を考えなければならない。『中外日報』は昭和六年以降の資料収集を予定したが、既収集分の検索が不便であった事から、能率よく行なえる様各資料の記号登録と見出しカード作成を行なう事とした。資料探訪調査は過去二年、新資料を発見するなど大きな成果をあげた。今年度は学寮草創期に教学の担い手であり、学寮時代は学寮支配を勤める事ともなった御堂衆寺院と、文政年間擬寮司を輩出した寺院の調査を行なった。この結果擬寮司出身寺院では、所化及び擬寮司の身分証明となる腰牌の実物を見る事ができた。これ迄調査した寺院の中でも、既に資料が散失したり火災に遭っているケースがあり、また講師出身寺院を対象を限っても相当数にのぼる事から、今後は調査回数を増やし、対象寺院も三講者出身寺院に限らず広く行なう事が必要となる。なお昭和六十一年度に写真撮影により収集した寺院資料（石川県一往還寺・常德寺、富山県一開正寺・真敬寺・円満寺）を整理し、目録は『研究所報』十八号に掲載した。

「研究」では、大谷高校教諭福島和人氏、行順寺住職武田統一氏、前大谷大学教授櫻部建氏に、研究発表をお願いした。

<刊 行>

- 1、『上首寮日記Ⅱ』（天保六年一月一天保十三年十二月）刊行が遅延しているが、解説・三講者変遷表を付し、昭和六十三年六月一杯を目処に刊行。
- 2、『条規集』（仮題）は、前年度の継続として明治三十四年から大正十三年迄の条規学則を『宗報』『真宗』より収集し整理。
- 3、『嚴如上人一代記』は、未翻刻分の第十一冊を翻刻。教化研究所蔵本『嚴如上人御事蹟記』の複写と校合。

<収集整理>

- 1、『中外日報』は、既収集分のうち明治期（二十九年一四十五年）を、各記事と台帳に記号・番号を付し、見出し（或いは内容要約）カードを作成。
- 2、「学科講座変遷表」、これは昨年度昭和四十一年度から大正十三年迄を作成しており、大正十二年から明治期へ遡る形で『宗報』等より収集。
- 3、「教職員在職表」も『宗報』『真宗』等の任免辞令記事より収集。
- 4、「講師年譜」、今年度は香月院深励を取り上げ、龍谷大学・同朋大学・大谷大学各図書館蔵書目録掲載分の著作目録を作成。
- 5、『上首寮日記』カード化は、第四冊（明治三年迄）を終了。また第一冊目のカードは『上首寮日記』Iと照合。
- 6、「学事史資料年表」は、既収集の資料カードの中から、「恵空・円乗院関係」および「真宗大学寮講義年鑑」を入力中で、現在千百レコードを入力。
- 7、「資料探訪調査」
 - a、昭和六十三年一月
愛知県碧南市光専寺一文政年間擬寮司幽玄出身寺院
 - b、昭和六十三年三月三日
京都市憶念寺一天保期学寮支配 円照出身寺院

京都市東光寺一学寮創草期の学僧東坊了海出身寺院

- c、昭和六十三年三月三十一日
京都市東光寺

<研究>

- 1、研究会
 - a、日時 昭和六十二年十月二十八日
テーマ 『歎異抄聴記』（曾我量深）について
発表者 前囑託研究員 福島和人氏
 - b、日時 昭和六十三年三月二十三日
テーマ 真宗大谷大学の意義
発表者 囑託研究員 櫻部建氏
- 2、講演会
 - 日時 昭和六十二年十一月四日
テーマ 江戸時代後期に於ける真宗教学の展開
発表者 行順寺住職 武田統一氏
- 3、資料検討会
 - 日時 昭和六十二年十二月二十三日
テーマ 昭和六十一年度資料探訪調査報告
発表者 木場明志・草野顕之研究員

福島氏の発表は『研究所報』第十八号に掲載。櫻部氏の発表は、同じく第二十号に掲載の予定である。

(三本記)

海外仏教研究

「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」

研究員・チーフ 長崎 法潤

欧米諸国における仏教研究はますます活発となり、専門家の注目を集めている。研究者の数も増加し、研究分野・研究方法も多彩である。そうした動向を的確に捉え、海外の研究者との関係を密接にするため、「海外仏教研究」は昭和57年度に発足し、大きくは欧米の仏教研究の動向を把握し、彼らの仏教研究に対する方法論や姿勢を研究することを目的として活動してきた。

具体的には、欧米で発表されている著作・論文の文献目録を作成することを主眼とし、そのために必要な資料を収集し分析調査を継続している。その成果の一部は『研究所紀要』、『研究所報』に発表されている。

そうした流れを受けて、昭和62年度には、引き続き海外における仏教研究に関する方法論の研究を主テーマにして、資料収集ならびに資料の検討・調査をおこなった。特に62年度には、従来、検討が加えられることの少なかっ

たドイツの仏教研究を中心に文献資料の収集と検討を行い、さらにソビエトの仏教研究への検討の準備に入った。

文献目録の作成に関しては、具体的な作成計画を練ったが、その過程において更に検討を加えねばならない問題（フランス文献の収集状況の未熟、分類上の問題 etc）をかかえ、その解決に努力することとなった。

さらに、その解決のもう一つの重要な課題として、海外の（あるいは海外に詳しい日本の）研究者を招いて研究会の開催がある。研究会は連続講義を含めて活発に開催され、今日の仏教研究に関わる重要な研究者から、貴重な研究成果の発表や、研究の動向をうかがうことができた。

<研究会>

研究会は、海外仏教研究の重要な活動の一つであり、毎年十件相当開催されている。以下に今年度開催された研究会を総覧し、簡単なコメントを添えたい。

- 1、昭和62年4月4日
“The Buddha's Teaching as a Reply of Brahmanism”
Dr. Richard F. Gombrich（オックスフォード大学教授）
- 2、昭和62年5月6日

“The Rock Cut Canon in China: Findings at Fang-shan”

Dr. Lewis R. Lancaster (カルフォルニア大学バークレイ校教授)

3. 昭和62年6月18日

『変文と仏教』

Dr. Victor H. Mair (ペンシルバニア大学教授)

4. 昭和62年7月7日

『天台密教と三論思想』

Dr. M. R. Saso (ハワイ大学教授)

5. 昭和62年10月29日

“The Theravāda Version of Dharmavāda”

Dr. Y. Karunadasa (ケラニア大学教授)

6. 昭和62年11月24日

『チベット仏教における守護尊、護法尊』

今枝 由郎 (フランス国立中央科学研究所研究員)

7. 昭和62年12月1日

“Buddhism’s Contribution to the Religious and Intellectual Thought of Mankind...through a review of its doctrine of Anatta...”

Dr. Y. Karunadasa (ケラニア大学教授)

8. 昭和63年3月1日

『アーラヤ識と深層心理学の無意識——存在証明にかんする比較研究——』

William S. Waldron (大谷大学研修員)

9. 昭和63年3月17日

『ヨーロッパの仏教研究』

湯山 明 (国際仏教学研究所所長)

以上の如く、今年度は9回の研究会が開催されている。

聴講者の数は時節によりまちまちではあるが、概ね30～50名程が参加している。これらの研究会を通して、欧米の学者の研究の一端を直接に見聞でき、さらに文献資料収集のための貴重なアドバイスを受けることもできた。こうした研究会の役割は、国際的な研究者の交流の活性化する現在、貴重な情報源となってきた観がある。さらに本研究会の特色として、広く大谷大学以外の大学や研究機関との連絡をとるようにしているが、そうした方面からの参加者も増加している。特に今年度末に開催した湯山先生の研究会には、学外からの多くの出席者を得た。なお、これらの発表の内、Victor H. Mair先生は『敦煌資料と高山寺『西遊記』第十七章の類似点』と題して、M. R. Saso先生は“The Lotus and Vajra Meditation of Tendai Buddhism—The Use of Madhyamika in Tendai Tantric Ritual”と題して、Y. Karunadasa先生は“The Theravāda Version of Dharmavāda”と題して、何れも『研究紀要』第5号に掲載された。その他の先生の論文も可能な限り逐次掲載していく予定である。

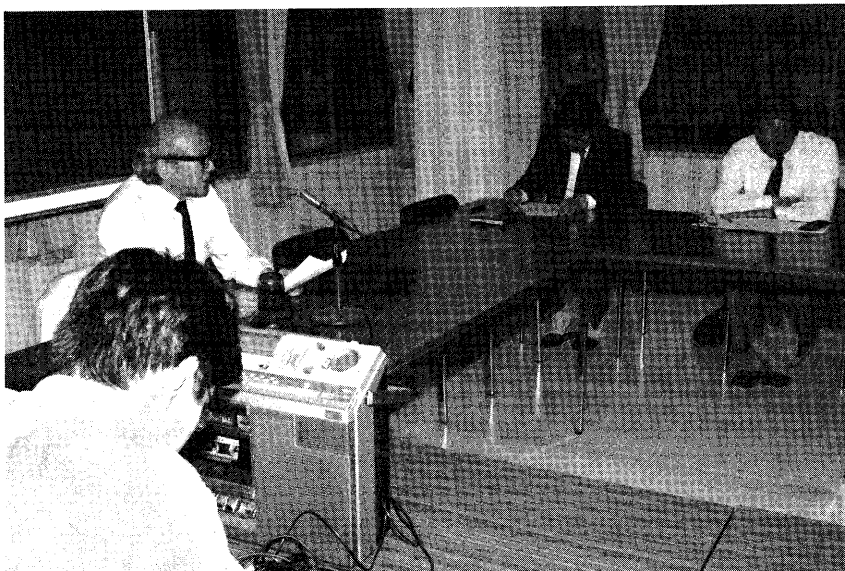
また、Karunadasa先生の日本滞在は約2ヶ月に渡り、その間特にお願ひして、「連続講座」という形で初期仏教を概説して頂いた(全体のテーマは“The Central Conception of Early Buddhism”)。詳細は既に『研究所報』No.18に報告したが、ここに開催日時と個別テーマのみを再録しておきたい。

〔第1回〕10月23日 The Religious and Intellectual Background of Early Buddhism.

〔第2回〕10月26日 Early Buddhist Theory of Knowledge (Epistemology).

〔第3回〕10月27日 The Social Thought of Early Buddhism.

〔第4回〕11月5日 The Buddhist Doctrine of



◀ 海外仏教研究班研究会

1988年6月23日

ウィスコンシン大学教授
清田実氏の発表

Causality (Paticcasamuppāda).

〔第5回〕12月8日 (座談会)

＜文献目録作成と資料収集＞

欧米の諸言語で発表された論文・著作を対象としたビブリオグラフィの作成は海外仏教研究発足当時の目的である。新たに発表された論文・著作をリストアップする作業を続けるとともに、今年度は具体的にビブリオグラフィ作成の手順の検討に入った。しかし、作業の過程で明らかになってきた分類方法の再整備の必要性の問題、フランス語、ロシア語等、いくつかの言語による論文の収集状態の未熟の問題など、いくつかの課題を背負うことになった。不備な状態での発表よりも充実した内容での発表が好ましいとの判断から、具体的な問題点の洗い直しによる実際的な作業を急ぐことになった。

その目的のもとに、ドイツ文献の再収集・再整理、フランス文献の確認、さらに豊富な古典資料を背景としたロシア語による研究資料の収集といった作業が今年度の中心となった。この作業は次年度においても継続されなくてはならない性質のものである。

今年度も約300冊の著作を購入し、海外仏教研究の図書室には現在約1,900冊の著作、約60種の雑誌が収集されている。正確なビブリオグラフィの作成には、現物の確認が必要であるとの考え方で、必要なものはできる

限り購入するように努めているが、海外における出版物の情報は以外に少ない。複数の出版ニュースを照会しても、同種の情報が得られるだけで、少しマイナーな出版となると情報の入手はとたんに困難となる。こうした状況の中で、多くの出版物に出会えるためのより精密なネットワークの獲得が必要となっている。

なお、現在ピックアップしている論文の数も3,000件を超え、ようやく文献目録が作成可能な領域に入ってきた。すでに述べたような文献目録作成にかかわる諸問題を早急に解決して、十分な検討のもとに具体的な目録作成作業に入らなくてはならないと考えている。

また、海外仏教研究研究員(本学教授)多田稔先生が、昨年8月6日～15日までバークレーで連続して行なわれた三つの国際学会(第3回国際真宗学会・第8回国際仏教学会・東西対話集会)に参加し、その報告は『研究所報』No.18に「バークレーにおける3つの国際学会に参加して」と題して掲載されている。さらに、海外仏教研究チーフ研究員(本学教授)長崎法潤先生が一昨年ハンブルグで開催されたICANAS(国際アジア・北アフリカ研究会議)に参加し、その後ドイツ各地で文献収集や仏教関係の学者と交流された報告も、『研究所報』No.18にNo.17の続編として「西ドイツの仏教研究一点描―(続)」と題して掲載された。

(浅野記)

西蔵文献研究

「大谷大学所蔵の北京版西蔵大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

研究員・チーフ 小川 一乗

1. 研究資料

西蔵文献研究班は、大谷大学図書館所蔵の西蔵語文献を整理・研究するとともに、貴重資料を内外に紹介することを目的に組織されている。

本学図書館には、有名な北京版西蔵大蔵経を始めとして、ナルタン版大蔵経、およびチベット人自身の手になる所謂蔵外文献が四千点以上も所蔵されている。これらの文献は、明治以降日本人としては初めて西蔵入りを果たした寺本婉雅(1872—1947)によって、北京・青海で蒐集されたものが主であるが、これ以外にも、チベット入国の旅の途上、雲南省に消息を断った大谷派僧、能海寛(1868—1901)の齎したものの、さらには近年になってインド、ブータン等より購入、寄贈されたものも増えている。

大谷大学では、戦前から多くの人々が西蔵文献の研究・出版に携わり、本研究班が組織される以前に、北京

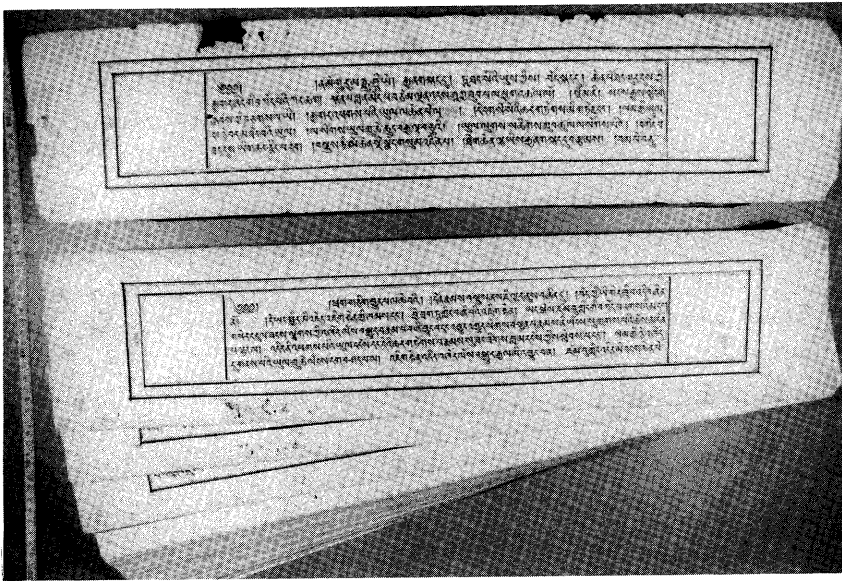
版西蔵大蔵経全巻の影印版、北京版西蔵大蔵経の勘同目録のうち甘殊爾部(經典部)の全冊、丹殊爾部(論典部)の六分冊(秘密部)、および蔵外文献目録を本学図書館より江湖に送っている。現在、これらの事業は本研究班において継続されている。研究班では、丹殊爾部勘同目録の第七分冊(般若部と中観部)、および蔵外目録の索引をすでに本研究所より刊行している。

2. 勘同目録の編纂

勘同目録は、北京版西蔵大蔵経をデルゲ版やナルタン版などの異版と対校し、漢訳、梵文原典のある文献については、その所在を示し、さらに各典籍の題名・章題・著者名・訳者名・校訂者名などの異同を示すとともに、各典籍の奥書を翻訳して研究者の便宜を計ったものである。編纂作業は第八分冊の出版に向けて進行中である。第八分冊には経釈部・唯識部・阿毘達磨部が収録される。

3. 蔵外文献の研究と出版

蔵外文献目録に対する索引はすでに刊行されたが、研究班では、索引作業と平行して、蔵外文献中に見出される稀観本を影印出版するための準備を進めてきた。今では世界各地の多くの蔵外コレクションが知られているが、本学のコレクションは木版による刊本のみにとどまらず、多くの写本類を含み、その中には他のコレクションには全く見出されない貴重な文献が数十点もあること



◀大谷大学所蔵
『西蔵語訳 大唐西域記』
の一部

が確認されている。我々は、当面の研究対象として次のような十数点の文献を選び出した。

- (1) No.12459 チベット語訳『大唐西域記』(抄本)
- (2) No.13971 『量決訳』の註釈「善釈集」ツァンナクバ作
- (3) No.13949-13954 中観論書
- (4) No.13955-13956 セラ寺教科書(アビサマヤ関係)
- (5) No.13957 セラ寺教科書(『入中論』関係)
- (6) No.13972 サキヤ派所伝の『俱舍論』註釈書
- (7) No.13984,13987 ウパローセルの文法書
- (8) No.13983 カラーパの文法書
- (9) No.12460 チベット語による中国仏教史
- (10) No.13981 サンプ学園寺歴代管長記

これらについては、研究の終了した文献から、影印版に解説、コンコードダンス等を付して順次刊行する予定であ

る。刊行にあたっては、臨川書店との契約に基づき、『大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書』の名のもとに、同書店から出版される。62年度には、第1巻としてチベット語訳『大唐西域記』を出版した。本文献はモンゴル人のゲンポキャブによって十八世紀中葉に訳されたもので、本学にある写本以外には北京に保存されている一本が知られているのみの貴重本である。詳しくは本研究所報第18号(15-15頁)を見ていただきたい。63年度は、インド論理学の精華とも言えるダルマキールティの『量決訳(Pramāṇaviniścaya)』に対するツァンナクバの註釈書の出版に向けての編集作業を行うが、引き続き、臨川書店から出版される予定である。本文献は、チベット人の手になる註釈書のうち、現存する最古のもので、しかも、本学所蔵のものが世界唯一である。

(松田記)

大蔵経学術用語研究

「日本撰述の俱舍論関係典籍における学術用語の総合的研究」

研究員・チーフ 鍵主 良敬

本指定研究では、前年度までの「浄土教関係典籍における学術用語の研究」の成果が『大正大蔵経索引』第43巻統緒諸宗部6として出版されたのに伴い、本年(62年)度より研究課題が新たに「日本撰述の俱舍論関係典籍における学術用語の研究」と設定され、組織の異動が行われた。

新しい研究課題は、『大正大蔵経』第63巻・第64巻・第65巻(一部)所収の日本撰述の『俱舍論』関係典籍(若干の三論宗関係の典籍を含む)について、それらの解説を通して特に重要な学術用語を選定し、その分類研究を行い、その研究成果を『大正大蔵経索引』第35巻統緒疏部1として昭和63年度末に出版することを目的としたものである。今回、学術用語研究の対象となる典籍は主として日本撰述の『俱舍論』に關した注釈である。『俱舍論』とは周知のごとく、仏教の基礎学として古来学ばれてきたものであり、我が国も例外ではない。我が国の『俱舍論』の注釈の伝統は主に俱舍宗や後の法相宗として中国から伝えられたものであり、その内容は中国の著名な注釈家の説、例えば普光や法寶の説、を引用するものが殆どである。しかし、なかには、直接『婆沙論』や『阿含』

などの原典に当たったり、今では現存していない多くの注釈家たちの説を引用していたりするので、学問的にも意義のあるものもある。『俱舍論』に引用される『阿含』を同定しようとする法幢『俱舍論稽古』などはその代表的なものであろう。また、快道『俱舍論法義』はいささかペダンティックではあるが仏教以外にも互るその多様な引用文献は興味を引くであろうし、更に、『中論』に關した注釈である安澄『中論疏記』も、幅広い引用によりその学問的意義は大きいと思われる。従って、このような典籍に対する学術用語の索引は仏教関係に止まらない幅広い意義が認められるであろう。

さて、本研究は実質的には前研究体制の下で前研究と並行して昨年度より始められている。昨年度はまず典籍の解説を行いながら索引に付すべき学術用語の選定（線引き）作業に着手した。

本年度は、新たな研究体制の下で昭和63年度末の索引出版に向けてその編纂作業を行った。その作業を順を追って略記する。

- (1) 昨年度に引き続き、学術用語の選定（線引き）を行う。[8月末完了]
- (2) 線引きの完了した典籍から順次、その用語をカー

ドに書写する。(カード数約12万枚)この作業には多数の学生諸君の御協力を得た。[10月上旬完了]

- (3) カード化された用語をチェックしながら所定の30項目に分類する。[11月完了]
- (4) カード化された用語の親字を分類し、その読みを決定する。[1月中旬完了]
- (5) カード化された用語を50音に配列する[3月完了]
- (6) 50音に配列されたカードを原稿用紙に浄写する。この作業にも多数の学生諸君の御協力を得た。[5月上旬完了予定]

以上が本年（62年）度に行われた作業の概略であるが、これらの作業の内、(1)と(2)、(2)と(3)、(5)と(6)はその能率を考慮して、並行しながら実施した。(6)の作業を終えることにより、今回の索引編纂作業は一つの大きな山を越えることが出来るが、これには我々研究スタッフ以外の先生方や多くの学生の諸君の御協力のお陰である。この場を借りて、お礼を申し上げたい。

次年（63年）度は50音別索引の原稿を完成させ（5月中旬）、解題・凡例・項目別索引・検字索引などを整備し、校正作業を経て出版（2月末）に至る予定である。

(兵藤記)

＜一般研究＞

昭和63年度「一般研究」研究目的紹介

＜共同研究＞

教行信証の基礎的研究

(継続)

研究代表者 細川 行信
 本学教授 (真宗学)

本年度の研究は、昨年度の研究に引き続いて行うものである。従って、研究目的並びに意義については、既に『研究所報』(No11・P2、No17・P14)に記してあるので省略する。

昭和59・60両年度に亘った研究の成果である『研究所紀要』第4号とその別冊1(『教行信証』科文集)・2(テキスト「化身土」末巻及び文献目録等)がようやくにして公表された。これらの諸研究を基に、研究が進められることが望まれる。

昨年は「教」・「行」二巻の基礎的研究・テキスト作成であったが、本年は、「信」巻の作成を目指し、その為の基礎的研究及びテキスト作成を行うことを目的として研究を進めてゆく。研究計画・方法は、次のような形で行う。

- [A] 『教行信証』「信巻」のテキスト作成
- (1) 坂東本を字体・字数・行数等の全てを真蹟本の形態通りに原稿化する。そして『真蹟集成』の丹山本による朱点と丹山本との照合を兼ねて行う。
 - (2) それを他の2本の影印本と照合・校訂を行う。
 - (3) 更に、諸版本(寛永本・正保本・明暦本・寛文九年本・寛文十三年本)との校異を行う。それには、東本願寺・西本願寺各出版の聖典との校異を含む。
- [B] それと共に、『教行信証』の引用文を大正大藏經の諸経論釈文と照合し、その問題点を明確にする。

以上の様に、研究体制を二班に分け、上記の事項を中心に研究を進める予定である。

〈個人研究〉

パーリ仏典における
大乘的思潮の形成

研究員 吉元 信行
 本学専任講師 (仏教学)

従来、南方仏教諸国に伝わるパーリ仏教は、“いわゆる小乗仏教”であるとされたこともある。しかし、その教義の中には、驚くほどに大乘的性格をもった思想が認められることがある。その代表的なものは、仏伝文学における燃燈仏を始めとする過去仏の思想であり、あるいは、十波羅蜜に代表される波羅蜜の思想であろう。そしてまた、南方仏教徒の間には、未来仏“弥勒”の信仰も広く流布している。このほか、仏伝文学以外の資料にも、ジャータカやアパダーナ等において見いだされる大乘的

思潮は枚挙に暇がないほどである。

それらの思潮のいくつかを検討してみると、仏教の根本分裂以前の前大乘的思想がそのままパーリ仏典に伝えられたと思われるものと、それ以後の北伝の大乘仏教の影響を受けたと思われるものの両面が認められる。

そこで、本研究では、嘱託研究員・研究補助員の協力を得て、特にパーリ仏典の中でも大乘的色彩が濃く認められる新資料“Sarasangaha”を中心として、関連文献や、サーンチー大塔におけるレリーフ等の考古学的資料の中にこれらの思潮を精査して、その思想形成における思想的・文化史的背景とその形成過程を究明し、そのことによって、仏教思想史上に占める大乘仏教思想の特質を再確認したい。

〈個人研究〉

生と思想

—F・ニーチェを中心として

研究員 須藤 訓任
 本学専任講師 (哲学)

思想研究は大別すると三種類に区別されると思われる。

(1) 思想を自律的なものとみなして、思想内部における契機相互間の整合性を明らかにしたり、あるいは逆に論理性の破綻を指摘したりする内在的な解釈。問題史的なアプローチや、いわゆるテクニク批評とよばれる解釈姿勢も、思想やイメージの自律的運動を重視する点で、そのうちに含めてよいだろう。

(2) 思想とその思想をうみ出した思想家の生涯とその影響関係を細かな事実考証を通して解明してゆく実証的アプローチ。時代・風土・文化の中に思想および思想家を位置付け、その中でその意義を確定しようとする観点も、その一部と考えられる。

(3) 思想家の生と思想との関係を問う点では(2)と同じであるが、しかしストレートな影響関係に照準を定めるのではなく、作者の意図を知らず知らずのうちに裏切ってしまう、生とよじれた関係をかたちづくる思想の姿をみきわめるとか、(2)ではおのずと前提されてしまう生と

思想相互の異次元性を廃棄して生の網の目の中に思想を一種の出来事として組み入れて、その網の目の中で発揮される思想の力を測定するとか、あるいはまた、ある特権的瞬间に生と思想がいわばスパークし融合したために生じた特異点の決定に応じて、いかに生と思想という二つの系列が再度拡散しつつ変容してゆくかを記述するとか、きわめて錯綜した生と思想の関係を浮き彫りにしようとするアプローチ。

本研究の目指すものは、(1)や(2)のアプローチも充分尊重しつつ、特に(3)のアプローチによる思想解釈である。その主たるテーマは、現在のところ、フリードリヒ・ニーチェであるが、少なくともニーチェの思想と生涯の関係に対しては(3)はきわめて有効であると考えている。ただし、(3)は研究「方法」としてその内実が百パーセント解き明かされたというにはほど遠い、といわなければならない。その着眼はごく最近の日付をもつにすぎないからである。(3)の推進者たちは、P・クロソウスキー、G・ドゥルーズ、M・フーコー、J・デリダ等、現代フランスの思想家たちであるが、これらの人々の知見に学びつつ、また、彼らの思想を更に展開しようとする新たな研究成果を取り入れつつ、六十三年度はニーチェの中でも殊に中期ニーチェの生と思想の関係に、出来事としての思想という観点から、光をあてたいと思う。

〈個人研究〉

中国近世前期における
仏典の開版と伝播

研究員 藤島 建樹
本学教授 (東洋史学)

10世紀以降の東アジアは大きな変動期を迎える。長城以北に興起了た契丹族の遼の建国に端を発したこの動きは、さらに女真族の金に受けつがれ、つねに南を圧迫した。一方、漢民族も五代十国期の分裂時代を取めた宋が統一国家として北方からの圧力に対抗する。金の重圧に耐えかねて南遷した宋の必死の抵抗も、13世紀の後半、怒濤の勢いで押しよせた蒙古族によって破られ、外民族としては初めて全東アジアを統一した元の支配が確定する。しかしこの間の熾烈な抗争は破壊や混乱だけをもたらしたわけではない。両者に新しい智恵や技術をもたらす契機ともなった。その一つに木版印刷の技術がある。分裂期に地方的規模で改良が進んでいた印刷技術は、宋の統一とともに全国的規模で活用され、新時代の思想の伝播と文化の深化に貢献した。

仏教に関しても仏典の開版・普及の面で印刷術のはたした役割は大きい。北宋のはじめに開始された印經院に

よる勅版大藏經の雕造・刊行事業は、蜀の印刷術を中央に伝えるとともに大藏經出版の先駆となった。そして大部の大藏經が民間でも作られるようになった。南方福建での東禪寺版、南宋に入って完成を見た同じ福州での開元寺版と続き、さらに湖州思溪の円覚禪院での思溪版、そして元代へ継承される磧砂版の刊行へと引きつがれてゆく。

一方、北宋勅版に対抗する意図があつてか、遼も大藏經を国家事業として刊行した。この契丹蔵は高麗へもたらされ、高麗初雕本や義天の統蔵經、さらに再雕本などの底本とされた。また金朝治下、山西では庶民の零細な寄進を集めた蔵經開版が行われた。この金蔵の存在は、仏典の民間への伝播の実態を如実に証明するものであろう。

こうした大藏經刊行の南北の流れは元代に伝えられ新興教団白雲宗による普寧寺版に代表されるように、より広く、深く社会に定着し、さまざまな版本を生み出すのである。今は大部な大藏經を例としたが、これを小さな個々の仏典にまで広げれば、その出版はきわめて広範囲に及ぶ。

本研究は、(一)、このような蔵經の版本を整理し系統を明確にすること、(二)、開版事情を刊記などより調査分析すること、(三)、仏典の種類と所在を調べて伝播の経路をたどること、などを目的とし、仏教史・文化史の空白と誤謬をいささかでも補訂することに努めたい。

本年度は、まず本学所蔵の宋元版仏典の再調査を重点課題として行う。(丁)

〈個人研究〉

新美南吉資料研究
——「哈爾賓日々新聞」掲載
作品について——

研究員 齋藤寿始子
本学教授 (児童文学)

近ごろ1920年代に世間の目が注がれている。児童文学者新美南吉(1913—1943)は、まさに、日本の近代文化運動を象徴する児童芸術雑誌『赤い鳥』から1920年代に誕生した人である。

鈴木三重吉、北原白秋に見出され、育てられた南吉の生存中は、決して平穏な文筆活動が展開できたわけではない。むしろ、第一童話集が出版されたあとは、戦時下のさまざまな統制のもと、発表の場はほとんど閉ざれてしまった。

生母・継母・養母と三人の母をもつ生育歴も、病弱であったことも、容易に定職に恵まれなかったことも、南吉には悲劇性がつきまとうのである。しかし、その生涯のうちに始めて静かな時代が訪れた。安城高等女学校への就職と、東京外語在学中の友人江口榛一からの「哈爾賓日々新聞」への原稿依頼で、江口榛一は「地の塩」の箱の設置者として知られているが、南吉と同じ頃、明

治大学文芸科に学び、やがて哈爾賓日日新聞に入社して、1938年から39年にかけて約一年半、学芸欄を担当していた。そこで、南吉へ手紙で何でもよいからどしどし送れと、発表の場を提供したのであった。

新美南吉の遺したものは、作品(童話・小説・戯曲・評論・研究・童謡・詩・短歌・俳句)、翻訳、日記、書簡その他、草稿、断簡にいたるまで、約十年近くを用いて資料調査と研究を重ね、一応の終了をみた。その成果は、『校定新美南吉全集』全12巻、別巻2として、1980～81年に刊行している。しかし、全集編集の段階に不明であった原稿や作品の調査は続行しており、存在が判明してきたものも少なくない。

なかでも「哈爾賓日日新聞」に関しては、哈爾賓市に本社をおいた日刊新聞で、当時の満洲国で発刊されていた日本語の新聞であるが、日本国内には所蔵されているところはなく、その実物に接することはできなかった。わずかに、南吉の残したスクラップにはり付けられたものが、唯一であった。

幸運なことに、中国の児童文学者の協力で、大連市の図書館に所蔵されているという情報もたらされた。行って調査しないではいられない。埋もれた作品を発見し、調査し、公表すること、これが本研究の目的である。

〈一般研究〉

昭和62年度「一般研究」研究概要

〈共同研究〉

教行信証の基礎的研究

研究代表者 幡谷 明
 本学教授 (真宗学)

この研究は、既に『研究所報』No17に報告してあるように、昭和五十九・六十年の二年間にわたって行なわれた研究に基づくもので、その目的ならびに意義は『所報』No11に記載済みである。過去二年間の研究概要は、『所報』No13・15に各々報告され、研究成果は、『研究所紀要』第4号とその別冊1(科文集)・2(教行信証雑誌目録・教行信証化身土末巻校異)として公にされたところである。

先の2年間の研究では、その構成員を、(A)共通表示研究(構成論研究)班、(B)原典研究班、(C)資料蒐集班の三班に分け、各々研究を進めて来たものである。当研究は、これらの内(B)(C)の二つの研究を継承したもので、特に(B)の原典研究を中心に研究を進めた。これは、従来の研究において、研究内容が与えられた期間と予算からでは研究が進めにくく、研究員にとって相当の制約を強いられたために、今回原典研究という基礎的研究の範囲に重点を置かざるを得なかったからである。

本研究では、構成員を(A)『教行信証』「教」・「行」二巻のテキスト作成、(B)「教」・「行」二巻の所引の経論釈の典拠の研究の二班に分けて研究を進め、これに昭和五十七年以降に発表された『教行信証』関係論文の蒐集を合せて行った。研究事項について略記すれば、A班では、

(-)坂東本を字体・字数・行数等の全てを真蹟本の形態通りに原稿化し、『定本親鸞聖人全集』第一巻と比較校異を行い、『親鸞聖人真蹟集成』第一巻の丹山本による朱点と丹山本との照合、校訂を行う。

(-)に専修寺本・西本願寺本とを照合し校訂を行う。

(-)江戸初期に刊版された寛永・正保・明暦・寛文九年・寛文十三年の諸版本との比較校異

の三事項にわたって研究を行った。これらの中で問題となった点は(-)についてであった。一つは、『定本』巻一は、

原典と親鸞の引用意図との相違を明確にするべく『教行信証』に引用する経論釈の典拠を脚註にて明記している。それらは、研究者諸氏によって誤記の少なくないことを指摘されているが、そればかりでなく、(イ)『集成』に記載されいながら『定本』に記載されていない字句等が僅かばかり検出されたし、(ロ)又、その逆も一・二点ではあるが検出された。第二に、『集成』本の朱筆の中には字誤が僅かばかり検出された。第三に、『集成』本の朱点は、原本に基づき丹山本を参考にして復元されたものであるというが、丹山順芸師の臨字本には二本伝わり(旧高倉学寮本・禿庵文庫本…恐らく正本・副本であると考えられる。)この二本において右訓・左訓に僅かばかりの異同が認められ、『集成』本に返して校異を行う場合その判定に苦しむところがある。

B班は、

(-)『教行信証』に引用された経論釈について大正新修大蔵経での典拠箇所調査

(-)それらの記述内容の比較検討

の二事項を行った。大蔵経との比較研究において絶えず問題となった点は、『所報』No13に指摘済みである。研究の手順として、(イ)『定本』脚註の表示(大蔵経の巻数・頁数等)を確認しながら、(ロ)大蔵経との字句の異同、取意省略状況などを一覧表としてまとめた。以下は、その過程で気付いた問題点、並びに、今後の課題として要請されるであろうと思われる事柄についてである。

まず、問題点であるが、(イ)『定本』の脚註にある大蔵経の典拠箇所表示には誤りが多い。甚しい場合には巻数が間違っていることがあり、これを正してより信頼のおけるものとしてゆく必要がある。又、(ロ)出典表示に加えて、さらに補足説明を要する箇所もある。次に、『教行信証』への経文等の引用状況をより整備された形で提示する為に、求められるであろう事柄である。大蔵経における所取場所の指摘を、その開始箇所だけでなく終了場所まで含めて行った。特に長文にわたる引用には、そのような配慮が必要となろう。文、偈頌の引用が断続的に行なわれている箇所については、その略されている部分の状況(頁数、段の表示、または行数、さらには内容の指摘)、偈文の順序が前後入れ替えられている様子などがうまく表示されることも期待されることである。更

に、乃至の部分、取意の文について、短文であればそれを書き出し、長文の場合には省略された文の要旨を記載することができれば、より完成度の高い表示となる。

資料蒐集については、蒐集資料のカード化を行った。

最後に、研究班で開催した研究会は、諸研究員の諸事情により十分な意見の交換ができなかった。次年度には、上に挙げた各研究の課題をもって研究を継続し進めて、より充実したものとしたいと思う。

〈個人研究〉

歎異抄のチベット語訳 のための研究

研究員 白館 戒雲
本学専任講師 (仏教学)

本研究は、日本の仏教において最も重要な聖教の一つである『歎異抄』を、その思想的背景の領解を通して、チベット語に翻訳することを目的として行なわれた。

まず、本学専任講師三明智彰氏の解説によりながら、『歎異抄』の全文を逐次チベット語に翻訳して行き、草稿を作った。次に、草稿が『歎異抄』の原文の意味にかなっているかどうかを仔細に点検し、真宗教学についてさらに疑問点を質し、三明氏からの詳しい解説を受けて幾度か推敲を重ねた。

『歎異抄』は、奥深く難解な聖教であり、今回の翻訳が十全にして完璧なものであるとは言い得ないかも知れぬ。しかし、つとめて原文の意を正確に領解し忠実に翻訳することを試みた。完成したチベット語訳『歎異抄』の清書原稿は、大学ノートにして86ページである。

『歎異抄』第二条の「親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。……(中略)……たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」という親鸞の仰せに見られるような師を深く尊敬し大事にする態度や、「地獄」(第二条)・「六道四生」(第五条)という語の示す六道輪廻の考え方など、『歎異抄』にはチベットの仏教と相通ずる点が多い。本研究で気づいたことや感銘を受けたこともいくつかあるが、ここではそれらの中特に教義と用語上の問題について三点のみ記すこととする。

第一に、『歎異抄』には、「たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」(第二条)、「本願を信じ念仏をまふさば仏になる。そのほかなにの学問かは往生の要なるべきや。」(第十二条)とあるように、ただ念仏の信心を重要視し、それによってのみ煩惱具足の凡夫が浄土往生を得ることが示されている。また、親鸞の書簡には来迎を諸行往生のこととして、「真実信心の行人は、撰取不捨

のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。」(「末灯鈔」第一通)と明示されている。この浄土往生の行と来迎に関して、チベットの仏教では、ツォン・カバは、「安楽国に往生せんとの誓願文」[Toh. 5275 (69)-86 all.]に、「聖無量光莊嚴を名づくる大乘經」(チベット訳「無量寿經」・「梵蔵和英合璧浄土三部經」p. 2861.24~p. 2881.16・魏訳三輩段の上中輩にあたる部分)を引いて、浄土往生のための四つの行、すなわち観想・善根・菩提心回向・発願を示し、この四行を行ずる者は大乘の聖者であり、臨終の時に阿弥陀仏とその聖衆の来迎にあづかって往生するとし、聖者ならざる凡夫はこの四行の中の菩提心回向を行ぜずとも、観想・善根・発願の三行によって来迎往生することができること説いている。真宗の教義から言えばそれは第十九願諸行往生の方便の教にあたるのであろうが、チベット仏教に於ても、菩提心を発し得ない凡夫の浄土往生をかく示しているのである。

第二に、『歎異抄』第十八条からも窺われるが、真宗の教では阿弥陀仏は方便法身と報身であるとされている。しかし、チベットの仏教では阿弥陀仏は変化身(応化身)である。たとえば、ツォン・カバの弟子ダルマ・リンチェンは、『現観莊嚴論の註』(Toh. 5433-25bl. 3)に、阿弥陀仏は変化身であると述べている。受用身たるためには、住処・聖衆・所説の法・寿命・身相に関して五つの特徴が備わっていなければならない。聖衆について言えば、受用身の仏を圍繞するものはすべて初地以上の聖なる菩薩でなければならない。しかし、『経』によれば阿弥陀仏の浄土には菩薩衆のみならず声聞衆も居るのであるから阿弥陀仏は受用身(報身)ではないと看做されている。この点は、中国の曇鸞・善導の思想を承けた真宗とチベット仏教との相違点である。

第三に、『歎異抄』では、阿弥陀仏の国土を「極楽」とは言わずに、しばしば「浄土」と言っている。これも中国浄土教の歴史を承けたものであるが、もと漢文の「浄土三部經」には「浄土」という語は極めてわずかであって、サンスクリット本にもチベット訳本にもそれにあたる語はない。ただ、「極楽」「楽有」にあたる語があるのみである。しかし、ツォン・カバは阿弥陀仏の国土を「浄土」と呼んでおり、チベットでは「極楽浄土」という言い方は定着して用いられているのである。この点非常に興味深い。

今後、より一層、真宗とチベット仏教との交流・対話が行なわれることを望みつつ擱筆する。

〈個人研究〉

日本僧伝文学の研究

研究員 石橋 義秀
 本学助教授 (国文学)

(1)

昨年6月に発行された『研究所報』No.17の〈研究目的紹介〉(p.15)で既に報告したことであるが、日本の僧伝文学は古代から近世にいたるまでさまざまな形で展開し、一つのジャンルを形成している。国文学の立場からも看過できない重要な研究対象といえよう。

日本の僧伝文学について考える場合、参照すべきは菊地良一著『中世説話の研究』(桜楓社刊 昭和47・4)の第二部「僧伝文学における説話形成」の論考である。つまり菊地氏は古代僧伝と中世僧伝について主として説話形成の面より考察し、(古代・中世の)僧伝を分類・整理し、具体的な解説を加えている。その研究は、日本の僧伝文学の概念や範疇を考えるうえで参考になるが、説話文学の研究に重点が置かれており、僧伝文学そのものの研究とはいえない。要するに、現在のところ僧伝文学について本格的に研究した著書は見られないのである。その間の事情(研究状況)については、拙稿「僧伝文学研究の軌跡と展望」(『国文学・解釈と鑑賞』第51巻9号、至文堂刊)に論述してあるので、ご参照いただきたい。

(2)

ところで、古代の僧伝文学の一部——例えば聖徳太子・鑑真・行基・最澄・空海などの伝記、いわゆる高僧伝——については、主として歴史学や仏教学の立場から研究が進められている。私もそれら高僧伝に対して、説話文学の面から関心を持ち、ささやかながら『書香』(大谷大学図書館報)第6号に「『聖徳太子伝記』および太子伝関係資料」を掲載したが、今後もその研究を進展させていきたいと思っている。

さて、前記・菊地良一氏の研究によると、古代の僧伝文学は個人伝・集成僧伝・説話系僧伝に分類できるが、中世の僧伝文学は鎌倉仏教の祖師たちの伝記が中心となり、従来の僧伝とは大きく異なる。さらに、近世の場合、僧伝の形態は中世と異なり、さまざまな姿に展開している。すなわち『本朝高僧伝』というような集成僧伝、その変形と考えられる近世の往生伝類、浄土宗・真宗などの諸宗派の祖師伝(絵伝を含む)ほか、個人伝といふべき僧伝が数多く現存する。それら中世から近世にかけ

ての僧伝文学について、本学図書館所蔵のものを中心に、現存資料を調査した。それについて書誌・文献学的な検討をし、整理して報告したいと考えている。なお、往生伝類については、不十分ながら調査結果を報告している(『近世の往生伝——大谷大学図書館所蔵・二十余种——』・『文芸論叢』第8号)。

(3)

以上概説した通り、中世から近世にかけて種々雑多の僧伝文学が現存するが、その中から未開拓のもので、特に注意すべき作品として㉔『扶桑寄帰往生伝』・㉕『日本古今往生略伝』・㉖『女人往生伝』などが考えられる。近世の往生伝類は、(1)先行文献からの抜書を主にするものと、(2)当時の往生人の聞書を主にするものとに大別できる。上記の三往生伝は(1)に属するが、前二書(㉔㉕)は漢文で、後一書(㉖)は和文で書かれている。(2)の(聞書の)諸往生伝に比較して、いずれも早い時期に編纂されている。すなわち㉔『扶桑寄帰往生伝』は延宝元年(1673)成立であり、編者性瑩独湛は中国僧で、日本において披見した諸書記載の往生人およそ200名の略伝を取録し、中国の往生伝の欠を補おうとしたものである。㉕『古今往生略伝』は延宝8年(1680)成立であり、編者山本道竹軒治斎は日課の暇に僧史伝記等所載の往生人を見て随喜し、89条の略伝を取めている。㉖『女人往生伝』は貞享2年(1685)成立であり、編者向西は女人の往生伝を震旦巻(上巻)・日本巻(下巻)に分け、各24条を取録している。

三書とも興味深い内容をもつが、それらについてはまだ十分に研究は進められていない。先ず、和文で書かれた『女人往生伝』に注目し、本学図書館蔵・二種の版本について調査をした。その書誌的解説および上下二冊の翻刻を『文芸論叢』第28号・第29号に掲載した。その内容についての解釈、基礎的問題はほぼ完了しているが、それを文学的に、あるいは仏教思想的に究明していく作業は今後の課題である。

(4)

(1)~(3)で触れた問題点や課題を吟味・検討し、最終的には日本僧伝文学について、系統的な位置づけをしなければならないと考えている。

最後になったが、一般研究補助金(50万円)のうち約8割を図書費にあて、『専念寺隆円上人集』、『大日比西円寺資料集成』、『統天台宗全書(史伝)』など26部、38冊の図書を購入することができた。今後ともその図書を有効に利用し、研究を進展させていきたいと思う。

〈個人研究〉

知識社会学の成立に関する研究

研 究 員 千葉 芳夫
本学専任講師 (社会学)

ここ十年程の間に、マンハイムに関する研究書が、相次いで出版されている。それらの多くは、現象学や解釈学の視点からマンハイム（の知識社会学）を捉え直すものとするものである。そこには明らかに、シュッツやパーガー等のいわゆる現象学的社会学の影響が認められる。これらの研究によって、従来はイデオロギー論の枠内に限定されることの多かったマンハイム知識社会学の解釈に、広がりや深まりがもたらされたことは疑いえない。

しかしそれらの研究には、知識社会学を、シェーラーやマンハイムの問題意識や当時の思想的・学問的状况との関連において、いわば「内から」捉えようとする視点が弱いように思われる。本研究は、このような最近の研究動向に鑑み、今一度ドイツにおける知識社会学の成立期に立ち帰り、その成立の事情を考察することを課題とするものであった。

研究のための作業としては、当然、著作・文献資料の整理・収集が主なものとなった。具体的には

一、シェーラー及びマンハイムの（主に知識社会学に関する）研究書及び関連図書の収集。これに関しては、既にある程度のもので、本学図書館に所蔵され、又個人でも所有しているので、そこに欠けているものを補うことが中心となった。それらは大別すれば、次の五つに分類しうる。①シェーラーの研究書、②マンハイムの研究書、③イデオロギー論、ユートピア論に関するもの、④十九世紀末から二十世紀初頭にかけての思想史・科学論に関するもの、⑤M・ウェーバーの近代化論に関するもの、及びハバーマスのモデルネ論等フランクフルト学派の近代認識・近代批判に関するもの。

二、欧米の雑誌論文の文献整理及び収集。知識社会学に関連する雑誌文献目録を整理し、Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie や American Journal of Sociology に収められたものを中心に、一九二〇年代から五〇年代頃迄の主要論文をコピーし収集した。

次に、研究の内容的な面に簡単に触れておきたい。

シェーラーとマンハイムの知識社会学に影響を及ぼした思想家あるいは思想潮流としては、マルクス（主義）、ディルタイを中心とする精神科学の動き、リッケルト等の価値論、歴史主義、更にジンメルやニーチェなどが学

げられる。本研究においては、中でも、ディルタイの世界観学との関連に重要な意味を認めている。ディルタイにおいては、世界観の類型論であった世界観学が、社会的要因と関係付けられ、いわば世界観の社会学となることによって知識社会学が成立した。ドイツにおける知識社会学の成立は、このように跡付けられると考えるからである。

このような世界観への学問的関心の背後には、客観的で自明なものとして存在した世界が、主観との関連において成立する世界像へ、更にイデオロギーへと転化したという、世界経験の変化があると考えられる。「精神の無力」（シェーラー）「危機の時代」（マンハイム）という意識は、複数の世界観の並存、更にはイデオロギーの対立の時代という認識から生じたものであろう。シェーラーとマンハイムの知識社会学の最大の課題が、このような状況及びそれから生じる相対主義の克服にあったことは、しばしば指摘される通りである。シェーラーやマンハイムを知識社会学へと導いたのは、こうした状況が成立した原因を社会的要因に求め、その探求を通して、複数の世界観やイデオロギーの並存あるいは対立の内に、ある秩序ないしは運動傾向を見出すことによって、精神や理念の力を回復しようとする意図であったのである。

ところで、シェーラーとマンハイムは、共に実証主義を批判し、現象学あるいは解釈学的方法に依拠している。実証主義は近代社会によって生み出され、近代社会の発展に相応しい科学的立場だと考えられた。一方、世界の世界像、更にはイデオロギーへの転化も近代の過程である。それも、近代という時代に生じた現象であるというに留まらず、まさしく近代が引き起こした過程であったと言える。そうであれば、このような状況を克服しようとする者が、実証主義を批判し、それに代る方法論的立場に依拠したのも当然である。

ドイツにおける知識社会学の成立は、その問題意識においても、方法論的立場からみても、近代の転換（ないしは終焉）の一つの徴候として捉えることができる。ここから、知識社会学の成立を知識社会的に考察するという、いわば知識社会学の知識社会学（知識社会学のイデオロギー論ではなくて）に属する課題が生じる。そのためには、M・ウェーバーの近代化論、フランクフルト学派の近代批判、モデルネをめぐる議論といった文脈の内に位置付け、知識社会学の成立をより広い視野の内で捉えることが必要となる。

＜個人研究＞

近代大谷派教団 社会事業の研究

研究員 佐賀枝夏文
 本学専任講師 (社会福祉)

年度内に資料収集、調査の終了した状況について、その主な三件について概要を報告する。

① 点字本『佛眼』

点字本『佛眼』は真宗総合研究所、当該研究がはじまって最初に発掘された資料である。近代大谷派教団社会事業史の調査・研究は本学、関連校においても比較的研究がすすんでいない領域ということもあり、当該研究をはじめて数ヶ月はまったく手掛かりもなく、気ばかりあせて過した時期であった。そんなある日、図書館課長の稲垣氏から朗報が入った。図書館書庫の未整理資料のなかから点字本が大量にみつかったので見にくい、というものであった。これが点字本『佛眼』との出会いであった。粉塵にまみれ黒ずんではいたが保存状態がきわめて良好な状態で発掘された。この時発掘されたのは94冊で、これら全ては昭和62年度に本学図書館に登録されて公開の日を待っている。発掘された94冊の点字本『佛眼』は大正10年2月に創刊されて、以来昭和8年6月第139号をもって終刊したもののうちの94冊である。我国の点字本による定期刊物物としては草分けであると同時に、当時の数少ない点字印刷物が94冊も大量に発掘されたこと事態意味のあることである。

点字本『佛眼』の創始者山本暁得は真宗大谷派僧侶で、氏は視覚障害者で真宗の信仰を通して、同朋の救済のあり方を具体的に実践した人物である。宗教者が救済事業に取り組んだ場合、その多くが「こころ」の救済に重きをおきがちであるが、山本暁得の救済のあり方は物心両面を具備し、救済が非常に高いレベルで実践されたものであるといえる。弘誓社（現在の京都ライトハウス出版部）を起し、佛眼更生学校を起し、佛眼協会を起し、視覚障害者の生活自立の道を開拓し、更に先進的に失明防止対策へと運動を展開した人物が山本暁得その人である。山本暁得、点字本『佛眼』は視覚障害の研究者にとって流涎のものであるといえる。私自身今後の大きな研究課題として自覚するとともに、学内、学外に広く公開していく使命感を感じている。

② 大草恵実の慈善事業

明治末期、浅草別院輪番として活躍した大草恵実との出会いは、我国の社会事業史の黎明をしるした内務省資

料のなかの「大草恵実を嚆矢とする無料宿泊所及び職業紹介所…。」この一文との出会いにはじまる。身体中の血が逆流するかの様な感動を覚えたのを今も忘れることができない。それを契機に『配紙』、『宗報』から大草恵実に関する記事の検索の作業がはじまった。大草恵実が浅草別院輪番職という重責にあったこともあり、無料宿泊所及び職業紹介所に関する、半期ごとの事業報告、会計報告など事業の全体像を明らかにする資料が次から次へと検索することができた。大草恵実を嚆矢とする無料宿泊所及び職業紹介所は漸次大谷派教団から政府へ移管されていたのであるが、その間に大きな役割を担ったのは大谷婦人法話会（現在の大谷婦人会）である。大谷婦人法話会は大草恵実が浅草別院のなかにあった貴婦人会なるものを大谷婦人法話会と改称、改組し全国組織へと育成したものである。大草恵実を嚆矢とする無料宿泊所及び職業紹介所が日本の近代化を支えたという事実と、漸次大谷派教団が当該事業から撤退した経緯については今後の課題でもある。また大草恵実には教団の慈善・慈恵事業を究明していくうえにおいて重要な人物であり、今後の当該研究課題の人物である。（昭和62年11月8日、於・花園大学、日本佛教社会福祉学会において「近代大谷派教団社会事業の研究」として研究発表）

③ 大谷派慈善協会誌『救済』

雑誌番号46、宗教の分野に分類され6冊に複製本されて本学図書館に現存している。標題から宗教の分野に分類されたのであろうが、『救済』雑誌は現存する数少ない慈善・慈恵雑誌のなかのひとつで、本来なら社会・社会問題に分類されるべきものであろう。近代大谷派教団が慈善・慈恵事業、感化救済事業、そして社会事業へと、どのように取り組んだのか、その全体像を明らかにできる唯一の系統的な資料が大谷派慈善協会であり、大谷派慈善協会誌『救済』である。また大谷慈善協会誌『救済』は発刊された年代（明治44年第1編第1号から終刊大正8年第9編第1号に至る）においても、年限において、そのボリュームにおいても、他の慈善・慈恵雑誌の群を抜いたものである。本来これだけの充実した内容をもった貴重な資料が全貌を明らかにしないまま本学図書館に眠っていたわけで、今後『救済』雑誌が公開されれば、我国の社会事業史が再検討されていくことは明らかである。現在、吉田久一先生（日本社会事業大学名誉教授）のご助言、ご指導のもとに本誌の復刻の準備をすすめている。

尚、昭和62年度真宗総合研究所研究員として採用して頂きましたことや同研究所の方々の親身のご援助を頂き、そして資料収集、調査を無事終了しましたことをここにご報告し、深く感謝いたします。

＜個人研究＞

近畿における重力探査 データのコンパイル

研究員 西田 潤一
本学助教授 (物理地質学)

はじめに

この研究は近畿地方における未発表の重力探査データ及び既発表のデータを同一の規格で編集することを目的として行った。重力探査はその性質上データの蓄積に多大の労力を要するために、多くの研究データが個別の狭い地域毎にまとめられているが、それらを任意に取り出す形にはされていない。近年のパーソナルコンピューターの発達に伴い、多くのデータを取り扱うことが可能となっているために、それらのデータをとりまとめることが必要となっている。

筆者はこの10年間に近江盆地を中心とした重力測定を行っているので、この蓄積されたデータを中心として、その周縁部のデータを加えてコンパイル作業を進めた。

作業手順

過去の重力データは現在のようにコンピューターが発達することを前提としていないので、そのままではコンパイルすることができない。例えば測点位置は地形図上に示すのみで、その緯度経度が示されていないケースが非常に多い。そこで全てのデータを1971年度の、絶対重力値、測定点の緯度、経度、海拔高度で表示することとした。ブーゲー異常は次の式で表示される。

$$\Delta g_0'' = g + 0.3086 H - 2\pi G \rho H + \Delta T + Ac - \gamma_0^{(mgal)} \dots(1)$$

ここで $\Delta g_0''$: ブーゲー異常 g : 絶対重力値 H : 海拔高度 (単位 m) G : 万有引力定数 ρ : 測定点周辺の岩石の平均密度 ΔT : 地形補正值 Ac : 大気の質量補正 γ_0 : 正規重力値 である。

絶対重力値は1971年の国際測地委員会の決議によってそれまでのポツダム系による表示から IGSN 71' 系へ移行したことに伴い、旧データを再計算する必要がある。この再計算のために、近畿地方の重力値の原点として京都大学理学部地質学鉱物学教室地下の国際原点 (略 F.S.) を選んだ。F.S. の重力値は、

$$g_{F.S.} = 979707.27 \text{ mgal である。}$$

測定点の位置表示は緯度、経度をそれぞれ度分秒で表示することとした。この際古いデータは地形図上に位置が表示されているだけのものが多く、その緯度経度を読みとれるものは改めて読み直し、新しい地形図上に落し

直した。古いデータの中には測定点の地図が逸失され、復元不能のものがあり、これらは除去される。重力データとして必要なものは、以上の絶対重力値、測点の緯度、経度、海拔高度である。正規重力値は正規重力式に従い、測点の緯度から導かれる。また大気の質量補正は測点の高度から計算される。正規重力式は、1967年以降何回かの改訂が行われているが、日本では一般に1967年式が使われている。測定図は2万5千分の1の地図毎に整理して作成した。

重力値には測定点近傍の複雑な地形による引力の影響が入っている。この補正値が ΔT であるが、この ΔT は測定点周辺の地形を構成する岩石の密度によって異なる。過去のデータにおいては地形補正法が様々であり、密度、地形補正打ち切り範囲も全く異なる。従って過去のデータの地形補正値は全く無視して、ここでは次のような方法による。

現在では日本国内のメッシュ状標高データが国土地理院で作成されており、このデータを利用して精度の良い地形補正計算をすることが可能となっている。この地形データを用いて大型計算機で地形補正をする方法が桂等 (1987) によって開発されており、今回の全てのデータはこの方法によって地形補正を行った。なお、ここでは他研究機関からのデータとの統一を考えて、地形補正打ち切り範囲を50kmとした。このように地形補正法を統一しても補正密度が地域により異なるので、データには基本的に密度 1.0 g/cm^3 での地形補正値を入力しておく。このようにすることにより、任意の地域の重力異常値を計算する場合には、そこでの地殻の密度を変えることができる。

まとめ

現在までにデータとして近江盆地周辺の重力データをフロッピーディスクに入力した。この入力ディスクには更に新しいデータが得られれば次々と入力可能となっている。これらのデータは必要に応じて2万5千分の1の地形図毎に取り出すことが可能である。

研究所人事

交替

研究所主事

(昭和63年4月1日付)

(助教授・真宗学)

安富 信哉

(旧市橋弘道)

(なお、主事の交替に伴い「真宗学事研究」と「海外仏教研究」において、安富助教授が市橋助教授の研究員の任を引き継ぐことになります。)

〈客員研究員〉

ルイス・ゴメス (ミシガン大学)

『浄土三部経』の翻訳

本研究所では、昭和63年5月1日をもって、ルイス・ゴメス (Luis O. Gómez) 氏を客員研究員として迎えることになった。ゴメス博士は、ミシガン大学教授で、現在アメリカを代表する仏教学者の一人である。氏については、昨夏本学会場に開催された日本印度学仏教学会の特設シンポジウムにおいて、「仏教の学問的研究：研究の目標と原則」(The Scholarly Study of Buddhism: Goals and Principles of Research) と題して、解釈学をふまえた独自の的方法論を提示、発表し、聴衆に大きな問題提起をされたことで、ご記憶の方も少なくないであろう。氏は、1943年、フェルトリコに生まれ、エール大学東南アジア言語・文学科に学び、テデスコ (Tedesco)、ラーダー (Rahder)、ハイン (Hein) 各教授、とりわけ梵語学のインスラー (Insler) 教授のもとで研究。『華嚴經入法界品』(Gaṇḍavyūha) の文献研究で学位を取得した。その後、ワシントン大学のコンゼ (Conze)、ウェイリー (Terry Weily) 各教授のもとで研鑽をふかめた。中観、パーリ、初期禅思想、と広般な領域にわたって秀れた業績をあげてきた博士は、さらに浄土教の研究についても意欲的に取り組んでいる。氏の浄土教への関心は、ハイン教授のもとで、インドの「バクティ運動」(Bhakti Movement) について学んだことに始まる。とりわけ『菩提行経』(Bhadhīcāryāvataṛa) に思想的というよりも信仰的な観点から注目し、インド浄土教の止観や儀礼に関心を強く懐くようになった。博士によれば、浄土教は、西洋の仏教学者の間で従来仏教の傍流とみなされてきたが、けっしてそうではなく、むしろ仏教の主流と考えるべきで、大乘仏教のコンテクストの中で再考したいといわれる。本研究所には、1983年4月に「希望の宗教としての仏教——インド仏教からみた親鸞」(Buddhism as a Religion of Hope——Shinran in terms of Indian Buddhism) と題して講演されて以来因縁がふかい。現在、ミシガン大学アジア言語・文化学部で教鞭をとっておられる。今回は、研究所で、広瀬泉、古田和弘教授の助言を受けて、『浄土三部経』の研究と翻訳の仕事に専念される。

〈客員研究員〉

ウィリアム・ワルドロン (ウィスコンシン大学・本学研修員)

アーラヤ識の研究

本研究所は、昭和63年4月1日をもって、ウィリアム・ワルドロン (William S. Waldron) 氏の客員研究員継続の件を承認した。研究テーマは、「アーラヤ識の研究」(The Study of Ālayavijñāna) で、小川一乗教授の指導のもとに研究を続けることになる。

氏は、1954年米国ミシガン州に生まれた。デトロイトの高校を卒業後、インドに2年滞在。その間、チベットのラマ僧との親交を通して、仏教への関心をふかめた。帰国後、実存的関心とともに、より客観的な仏教の理解を求めて、仏教学を志し、ウィスコンシン大学に入学、チベット仏教学のゲシュソーバ教授のもとに学んだ。3年生のときには、一年間休学して、インドに渡り、ベナレス・サンスクリット大学に留学。やがてウィスコンシン大学大学院東アジア学部で仏教科に進み、清田実教授の指導のもと、とりわけ唯識を研究対象に選んで研鑽した。1985年、本学の二名の教員がウィスコンシン大学の仏教科に客員研究員として滞在した頃から、大谷大学留学への希望を強くもつようになった。唯識思想を、西洋の思想的文脈に照して、さらに文献的に解明したいと願った氏は、61年後期より本学研修員として迎えられ、今日に至っている。本年3月、研究所で「アーラヤ識と深層心理学の無意識——存在証明にかんする比較研究」(On the Relationship between Ālayavijñāna and Theories of the Unconscious in Depth Psychology) と題して、研究成果の一部を発表した。これまで一貫して、「瑜伽師地論」(Yogācārabhūmi) を中心に研究しているが、最近とみにアーラヤ識の解明のためには、阿毘達磨の知識が不可欠と痛感。「唯識3年、俱舍8年」という古人の言葉がよく分かるようになったという。

研究補助金交付決定

第13回 (昭和63年度) 日本私学振興財団の学術研究振興資金は、134件の応募の中から、76件の研究に対して、総額2億4千万円が交付されたが、本研究所からは、海外仏教研究班が「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」というテーマで応募し、初回の応募にもかかわらず、研究補助金の交付が決定さ

れた。なお交付金は250万円である。贈呈式は6月24日に、私学会館 (東京) で行われた。

研究所報 第19号

1988年6月30日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603 京都市北区小山上総町